

新出の三十番神絵像紹介―特徴ある図像の問題を中心に

The Introduction and Analysis of Two Newfound Works of

“The Thirty Protective Deities for a Month”

Focusing on the Iconographies

佐伯 英里子

SAEKI, Eriko

初めに

三十番神信仰

三十番神とは、一ヶ月三十日を毎日交替で国家や朝廷（禁闕）、法華経などを守護する三十の神祇を意味する。この三十番神は、平安時代の比叡山天台宗の慈覚大師円仁が如法経守護のために勧請した神々を創始とし、十二世紀の延暦寺の良正により三十神と当番日が確定したと比叡山関係の書には記される。^①やがて十三世紀以降、この信仰は比叡山以外にも広まり、民間信仰を取り入れながら発展し、守護対象も、法華経や国王、禁闕（朝廷）等々その種類を増していく。そして、十四世紀には、天台法華宗と同じく法華経を重んじる日蓮法華宗（以後、本稿においては日蓮宗と記述する）が積極的に導入し、室町時代を通して盛んとなり、十五世紀末、唯一神道の吉田兼俱との番神問答を契機として、日蓮宗の守護神としての思想的な整備がなされ、続く近世期には、日蓮宗の法華神道として隆盛を誇った。

三十番神絵像とは、この三十番神を勧請する儀礼の為に制作された絵画作品である。なお、三十番神絵像の現存作例で平安時代に遡るものはなく、金沢称名寺所蔵本（以下所蔵は略す）が鎌倉時代に遡る最古例と考えられる。^②

筆者は、この金沢称名寺本を初めとして三十番神絵像を調査研究してきたが、近年、日蓮宗寺院に伝来する図像的に極めて特異な作品二点を調査させていただく機会に恵まれた。そこで本稿では両本を紹介し、両本と基本構成を同

じくする座像形式の現存作品との比較も加え、特異な図像を中心に考察し若干の私見を述べたい。

I 現存する三十番神絵像の概観

ここでまず、現存する三十番神絵像についてその種類や形式、時代的変遷などを概観しておくこととする。

1 種類

三十番神の守護対象は前述したように各種あり、それぞれの目的に応じ当番日の神像が異なるが、現存する三十番神絵像は、一日熱田大明神から始まり、三十日吉備大明神で終わる良正勧請の「如法経守護」の三十番神を採用している。^④

次にその当番日と神名を列記する。

一日熱田大明神 二日諏訪大明神 三日廣田大明神 四日氣比大明神 五日氣多大明神 六日鹿島大明神 七日北野大明神 八日江文大明神 九日貴船大明神 十日伊勢大明神 十一日八幡大菩薩 十二日賀茂大明神 十三日松尾大明神 十四日大原野大明神 十五日春日大明神 十六日平野大明神 十七日大比叡大明神 十八日小比叡大明神 十九日聖真子大明神 二十日客人大明神 二十一日八王子大明神 二十二日稲荷大明神 二十三日住吉大明神 二十

四日祇園大明神 二十五日赤山大明神 二十六日健部大明神 二十七日三上大明神 二十八日兵主大明神 二十九日苗鹿大明神 三十日吉備大明神

なお、絵像の横に短冊形を設けて当番日と神名を併記するケースが多いが、大権現と大明神等の神号には若干の異同があり、伊勢は天照皇太神と表記する場合が圧倒的に多い⁵⁾。

2 形式

三十番神絵像には大別して、先述した金沢称名寺本を筆頭とする立像形式と日蓮宗系寺院に多く伝来する座像形式とがあり、両者の図像には微妙な相違がある。今回紹介する二作品は座像形式であり、本稿においては座像形式の作品との比較を中心に論ずる。なお、立像形式の代表例とその特色に関しては、註③に列記した拙論を参照されたい。

3 基本構成（座像形式）

以下座像形式について述べる。

画面上部に幔幕を描き、各神像は三曲屏風或いは鳥居を背にして礼盤上に座し、雛壇状に配列される。神像の下には勾欄、階梯を設け、獅子狛犬や隨身を描く。即ち、社殿内に鎮座する神像を描くこの形式は、天台宗延暦寺の鎮守神を描いた山王本迹曼荼羅と基本構成を同じくし、その強い影響関係が伺える⁶⁾。

最も現存作品の多い日蓮宗系三十番神絵像の場合は、更に画面上部に「南無妙法蓮華経」の七字題目を大書し、法華経や本地垂迹思想を説いた法華三大部の一つ『摩訶止観』からの字句を引用した賛文を書し、開眼した僧侶の署名や花押を記す事が多い。更に中世末期になると、飛天や三光天子が加えられるケースも増える。一般的に時代の下降とともに、附属物は増加傾向を示す。

4 三十番神絵像の当番日と配列（座像形式）

座像形式における現存作例に於いては、横に五神を並置し縦六段にわたって配列するものが最も多い。これに続いて多いのが、天照、八幡（以下尊号は省略）の二神のみを最上段に掲げる配列であり、これは日蓮宗開祖日蓮の神祇観を反映するものといえよう⁷⁾。

5 三十番神絵像の制作主体（座像形式）

三十番神信仰の淵源は比叡山に求められるが、室町時代以降は日蓮宗において盛んとなり、近世期に法華神道として隆盛を極めた為、座像三十番神絵像の現存作品もまた日蓮宗寺院に伝来しているものが圧倒的に多い。ただし、筆者が個人本（現在奈良国立博物館所蔵）として紹介した作品は、十五世紀初期と推定される天台系の可能性が高い貴重な作例である。立像形式の作品には、前述した金沢称名寺本の他、談山神社本のように、日蓮宗以外の環境下で制作されたものもあることを付記しておく。

6 現存する代表的作例

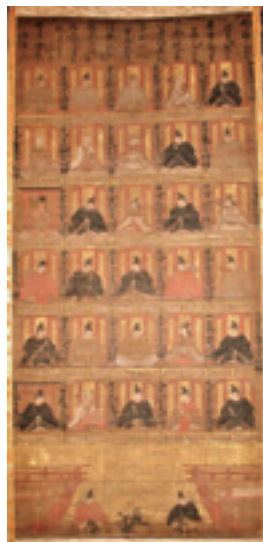
座像形式の作品中、絵像に制作年が明記されているもの、あるいは開眼主が署名している作品の代表例を列記する。

十五世紀 本法寺本（日親開眼） 図①

十六世紀 大法寺本（長谷川等伯筆） 図②

十七世紀 本行寺本（日遠開眼） 図③

そこで次に、筆者が近年調査させて頂いた二作品、本立寺と妙光寺所蔵の「三十番神絵像」の概要を紹介する。



図① 本法寺本三十番神絵像



図② 大法寺本三十番神絵像



図③ 本立寺本三十番神絵像

Ⅱ 「三十番神絵像」 西明石市 本立寺所蔵 図④

本立寺

成道山本立寺は、元和三年（一六一七）本圀寺十六世究竟院日禎が、信州松本に開いた本源寺をその始まりとする日蓮宗寺院である。その後、檀越小笠原氏が明石に移転し、寺号を本立寺と改称。更に小笠原氏は九州小倉に移り、本立寺も福岡に移転した。一方、寛永十一年（一六三四）に旧本立寺跡に本妙院日種が妙円寺を建立、後寺号を改称し本立寺に復帰している。更に昭和二十三年京都にあった勅願所一道院を合併し、その什寶を本立寺に格護することとなった。一道院は、吉祥院日喜を開山とし本蔵寺と号していたが、六世日法（一六五九〜一七一九）が修法の靈験により靈元天皇の病氣を平癒し、一道院の称号を賜って以来、勅願所となって一道院と号した。

次に本立寺本の概要を記す。



図④ 本立寺本三十番神絵像

1 材質装丁 絹本着色 縦九一、四センチ、横四八、五センチ（右八、六センチで絹継） 桐箱入り

2 伝来

軸裱背には、次のような旧裱背のものと思われる朱書が添付されている。また桐箱蓋裏には、裱背朱書と同筆の朱書と別筆の墨書が記されている。（図⑤）
軸裱背朱書

「奉納主松原通室町東江入池田吉兵衛」「二道院什寶 卅世 日芳」
桐箱蓋朱書

「明治二年神佛混合御制禁ノ砌 此三十番神ハ元北野天神什寶ノ由 池田吉兵衛鈴木共求 此品當山ニ奉納ス 取扱主 萬壽寺烏丸東入 中澤半兵衛 井上利八」

桐箱裏墨書

「明治二十一年八月表桐破損ニ付六角通り小堀甚兵衛 施主ニテ悉皆修復出来候也 卅二世 日如」

右に示した軸裱背の朱書と桐箱蓋裏の朱書には、この三十番神はもと北野天神の什寶であったが、明治二年の神佛分離の際に、檀越池田吉兵衛が鎮宅靈府と共に中澤半兵衛、井上利八を介して買い求め、三十世日芳の代に一道院に奉納したという経緯が語られている。そして墨書は、三十二世日如の代に、桐箱が痛んだので小堀甚兵衛が施主になり全面的に修復を加えたことを記す。即ち、この三十番神絵像は、現在日蓮宗寺院に什寶として格護されているが、もとは北野社の所有であり、そこで祀られていたものと推察される。この伝来により、本立寺本は、数少ない非日蓮宗系（神社伝来本系）三十番神絵像として貴重な作品であることが確認できる。



図⑤ 本立寺本裱背朱と箱蓋裏朱書及び墨書

3 図様概観（番神名と配当日 表1参照）

画面には、三曲屏風を背にして礼盤上に座す神像が、横に五列縦に六段にわたって配される。各神像の上部には金泥の枠を設け、左に神名、右に当番日を墨書す。当番日の配列は、十五世紀の基準作である本法寺所蔵の日親（一四〇七〜一四八八）開眼三十番神絵像と同じであるが、神名において、十日天照を伊勢と表記をしている点は注視したい。また平野と大原が入れ替わっており、これは法華三十番神の当番日とは明らかに齟齬し、誤記と思われる。なお画面上部に幔幕といったものは無く、下部に通常見られる欄干や階梯も描かれない。あるいは、明治二十一年に修復された際に切断された可能性も考えられる。

4 図像

全体の図像を概観すると、まず女神形が極めて少ないことに気づく。これは十五世紀に遡る本法寺日親開眼の作例と共通しており、制作年代推定を考える上で興味深い。なお一般的に座像形式では、時代が下降するに従い女神形は増える傾向を示す。

一方、日親開眼の諸作例と明らかに異なり、他の諸本にも見られない本立寺本の特徴は、八幡と稲荷の特異な図像である。まず八幡は通例では僧形か、俗形束帯形で表されるが、本立寺本では、袍の上に袈裟を付け、神像のシンボルである日輪を頂き、錫杖と数珠を持つ。次に注目されるのは、稲荷の図像で、通常「三十番神絵像」の場合女神形で表されるが、本立寺本では稲束を膝前に置く白衣の翁形で描かれる。この両図像については妙光寺本と合わせ後述した

表1 本立寺本

十四日平野束帯	十三日松尾束帯	十二日賀茂束帯	★十一日八幡冠・袈裟・錫杖	★十日伊勢唐装
十九日聖真子僧形	十八日小比叡僧形	十七日大比叡唐装	十六日大原野束帯	一五日春日束帯
廿四日祇園牛頭天王	廿三日住吉束帯	★廿二日稲荷白衣・稲束	廿一日八王子束帯	廿日客人女神
廿九日苗荷唐装	廿八日兵主束帯	廿七日三上唐装	廿六日武健部束帯	廿五日赤山唐装
四日氣比束帯	三日廣田束帯	二日諏方束帯	一日熱田束帯	卅日吉備束帯
九日貴船束帯	八日江文唐装	七日北野束帯	六日鹿島唐装杖	五日氣多束帯

★ 図像の検討をする神像

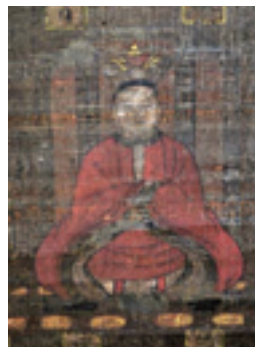
い。

更に、唐冠唐衣に立笏する十七日大比叡の図像も注視しておきたい。（図⑥）大比叡は、山王信仰の中心で、山王本迹曼荼羅では中央に大寫し、その図像を俗形と僧形で表す二通りがある。俗形で表す場合は、正に本立寺本と同じ唐冠唐衣に立笏の図像を用いるのである。対して、日蓮宗系の場合は、唐冠唐衣までは共通するが、立笏はせず、特殊な印相を示し微妙な相違が見られる。（図⑦）その背景には、本立寺本が、北野社という、天台宗延暦寺と密接な関係にある環境下で制作されたこととの関連が推察される。

最後に、不完全な図像を示す二十七日三上について付記しておきたい。この図像は手の形から持物を描くべき図像でありながら（左手は杖のような棒状の物、右手には卷子か数珠か？）、描いていないように見える。何らかの理由で描き添えなかつたのか、しっかりとした図像に対する認識がなかつたのか、いづれにしても奇異な印象は否めない。（図⑧）



図⑤ 本立寺本三上



図⑥ 本立寺本大比叡



図⑦ 大法寺本大比叡

5 表現

面貌表現は丁寧な描線を用い、着衣の線もしっかりとしている。色彩は退色が著しいが、当初はより華やかな印象を生んでいたと想像され、金泥を要所に用いて荘嚴するなど、仏画を専門とする畫師の作と推察される。ただ像容は

堂々としているが、礼盤に衣の端が大きくはみ出し、礼盤の奥行もあいまいで図像の写し崩れも認められる事から、既存の図像をもととした工房制作の可能性が高い。なお、右端最下段の九日貴船は不自然に濃い朱が無造作に塗られており、後世補彩されたと考えられる。

6 制作時期

絵絹の絹目が粗いいわゆる足利絹を用いており、室町時代の特色を示す。修復時に画面の上下が切り詰められた可能性があるが、全体に構成はシンプルで像容も堂々として古格を保っている。以上を勘案すると本立寺本は、十五世紀に遡る制作時期が想定される。

Ⅲ 「三十番神絵像」 泉佐野市 妙光寺所蔵 図⑨

妙光寺

大阪府泉佐野市にある本覚山妙光寺は、大覚妙実を開山と仰ぐ延文三年（一三五八）創立の日蓮宗寺院である。旧本寺は京都妙覚寺。戦乱興亡の間、何度も兵火で焼失したが、永享年間の四世日延（二四四四没）、天正元和年間の九世日近（二六二三没）、延宝天和年間の二六世日遙により再興された。寺には多くの寺宝が格護されており、また日遙（二七〇一〜一七二三の間二度住職を務める）による克明な寺の記録が残されている。¹⁰⁾次に妙光寺本の概要を記す。



図⑨ 妙光寺本三十番神絵像

1 材質装丁 絹本着色 縦八七、〇センチ 横四〇、五センチ 桐箱入り

2 本紙袷背の墨書銘 図⑩

二〇〇四年に修理された際に本紙袷背の墨書銘が別置され保存されている。¹¹⁾
「奉開眼供養
諸仏救世者 住於大神通 為悦衆生故 現無量神力 常在靈鷲山 我此土安穩
南無妙法蓮華經 法花守護三十番神像 真造院 日甄 花押
今此三界 皆是我有 其中衆生 悉是吾子 唯我一人能為救護
願主信心之俗名□郎」¹²⁾



図⑩ 妙光寺本袷背墨書部分

3 開眼上人及び讚文

袷背墨書の開眼銘によれば、この作品は永正九年十二月十三日（一五二二）に、日甄（につけん）により開眼供養されたとされる。讚文は『法華経』『譬喩品』『如来神力品』『如来寿量品』より引用。これらは、他の日蓮宗系三十番神絵像にも認められる讚文である。上記賛文中「譬喩品」「如来神力品」は十五世紀作の本法寺日親開眼の絵像にも引かれている点、興味深い。また「如来寿量品」は日蓮宗においては特に重視される章で、桃山時代以降の三十番神絵像にも散見される。

開眼上人の真造院日甄に関しては、妙光寺過去帳にその名が無く、旧本寺の妙覚寺の歴史にも見えない。ただ、「日甄」の名は、静岡県池田本覚寺八世日甄上人（大永元年一五二二没）¹³⁾と一致し、年代的にも齟齬はなく同一人の可能性がある。但し、本覚寺日甄の院号に関しては確認が取れておらず、本覚寺と妙光寺との関係についても不明である。¹⁴⁾

一方、本法寺の寺宝「日親上人曼荼羅本尊」の袷背に墨書された、二十三世遠成院日近の元禄一二年（二六九九）九月一七日付極に、「弟子長旭日甄 感得」の字句が認められるのは興味深い。長旭日甄なる人物に関する詳細は不明であるが、日甄が日親上人の弟子となると、同じく年代的にはこちらも齟齬がない。この日甄が真造院日甄と同一人であれば、三十番神信仰と深く関わった

像に関し、他の座像三十番神絵像の図像とも比較しながら、再考してみたい。

IV 注目すべき図像

1 天照皇太神（伊勢大明神）

伊勢内宮の祭神である天照皇太神は、多彩な表情を持つ変貌著しい神の代表といえる。記紀神話の中では光輝く女性神としてイメージされるが、中世には同じ太陽神に由来する大日如来や観音菩薩と習合し、長谷寺の雨宝童子のような姿でも現れる。

三十番神絵像の場合、十五世紀から十六世紀に残る作品は立像座像ともに男神形をとり、衣冠・束帯の和装スタイルが一般的である。(図⑪)そして、十七世紀に入ると、座像の場合は神鏡を持つ女神形が登場する。(図⑫)こうした変化の背景には、明応六年（一四六七）に日蓮宗と吉田兼俱との間で行われた番神問答以後の、吉田神道による三十番神図像の影響の可能性が考えられる。¹⁵吉田神道の図像では、天照に神鏡を持つ女神形を採用しているのである。なお、こうした動きと連動するように、十六世紀末から、天照の配置は上段の左端から中央に移動し、天照が全国神祇の中心にあって、最高位に位置する事を印象づける構図が出てくる事は、極めて興味深い。



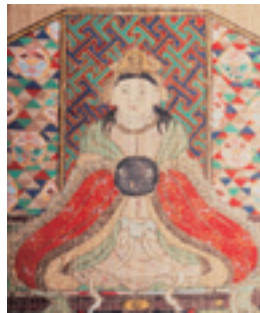
図⑬ 本立寺本天照



図⑪ 大法寺本天照



図⑭ 妙光寺本天照



図⑫ 本行寺本天照

それに対し、十五世紀作と推定される北野社伝来の本立寺本が、同じ男神形を取りながら、唐冠唐衣で立笏する唐装スタイルをとる点は注目されよう。

(図⑬)これは、主流を占める日蓮宗系とは異なる神社系の図像を示している可能性が考えられる。なお、同じく十五世紀作と推定される天台系の奈良国立博物館本は、女神形をとるが、吉田神道系とは異なり棒を持物としている。更に、近世以前の三十番神絵像において、鏡を持つ女神形は、天照以外でも見られない点は留意しておきたい。¹⁶

ここで、持物である神鏡に着目したい。十七世紀に現れる女神形は、神鏡を持物とする図像を示すが、妙光寺本では、神像を描かずこの神鏡のみを描いている。(図⑭)両者は図像的には異なるが、神鏡を天照のシンボルと捉えている点では一致する。更にこの神鏡が天皇の三種の神器を象徴するものと考えれば、そこには天照を天皇と結び付け、三十番神信仰の一つ禁闕（王朝）守護の思想を反映するものと解釈することも可能だろう。いずれにしても、神鏡という大胆な象徴的なアイコンが、どのような環境で誕生し、どのような経路で妙光寺本に取り入れられたかといったことについては、今後の課題としたい。

2 八幡大菩薩

八幡大菩薩の称号は、宇佐八幡が東大寺大仏建立の助成の功により賜った称号である。その後石清水に勧請され、奈良から平安にかけ応神天皇と習合し、王朝守護の性格を強める一方、平安末には源氏の氏神となり、全国に広まって武家の尊崇を集めるに至った。その図像は、弘法大師空海が感得したと伝える、日輪を頂き錫杖と数珠を持つ僧形と若宮八幡という俗形の図像がある。

座像三十番神絵像の場合、持物に相違はあっても、僧形像で表わすのが一般的である。(図⑮)但し、前掲した天台系の奈良国立博物館本は、僧形ではなく玉冠を冠り笏をとる俗体形で表わす。(図⑯)これは八幡が応神天皇と習合したことにより誕生した図像と考えられるが、先述した吉田神道でも同様の図像を説いている点、興味深い。¹⁷

ところが、北野社伝来の本立寺本では、袍の上に袈裟を付けて錫杖を持ち、日輪を頂く特異な図像を示す。(図⑰)この俗形と僧形、若宮八幡と大菩薩という八幡神の持つ神格と仏尊両者の属性を合成したような図像は、他の三十番神絵像には類例が無い。ただ、あえて探すとすれば、南北朝期に描かれた特異な天皇の肖像画が想起される。それは、画面上方に三社託宣（天照、八幡、春日）の紙を貼り、幔幕を結んだ社殿内に、日輪の付いた冕冠を冠の上に重ねた

後醍醐天皇が、袍の上に袈裟を付け五鈷杵五鈷鈴を持して礼盤に座すといった、異形の肖像画である。(図18) 後醍醐天皇が自らを神格化し、仏尊化したようなこのダブルイメージと本立寺本の図像には、共通する中世の神仏習合の複雑な様相や、変幻自在で融通無碍な表現を見る思いがする。それはまた、中世の北野社における神仏習合の実態を考える上でも大変興味深い図像といえよう。

一方、妙光寺本は、日輪を頂き、錫杖を両手で握る僧形で表す。(図19) 恐らく数珠が描かれないのは、写し崩れによるものと思われるが、一般的な日蓮宗系の八幡が翳を持物とし、日輪を描かない図像とは、微妙な相違が認められる。天照、八幡ともに、妙光寺本の図像は日蓮宗系の主流からは距離を置いたものであることが推察される。



図15 大法寺本八幡

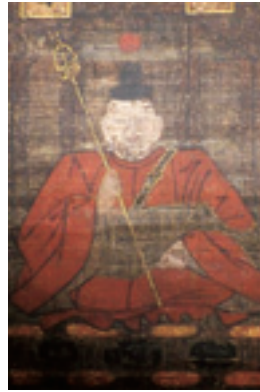


図17 本立寺本八幡



図16 奈良国立博物館本八幡



図19 妙光寺本八幡



図18 後醍醐天皇像(浄土寺) 清浄

3 稲荷大明神

本立寺本と妙光寺本に共通する図像として特筆したいのは、稲荷の図像である。(図20②①) 両者は稲束を担ぐか、置くかの別はあるものの、稲束と白衣像という点で共通している。三十番神絵像の場合、稲荷は座像立像を問わず、女神形で表すのが通例である。(図22) その背景には、稲荷が如意輪観音、弁才天、あるいは茶枳尼天(狐に騎乗する図像を示す)といった女神と習合を図った可能性を以前筆者は提示した。²¹⁾

では、この稲束を荷う白衣の稲荷は、どのように考えたら良いであろうか。そこで想起されるのが、弘法大師空海が教王護国寺(東寺)を開くに際し、稲束を荷う翁の姿をした稲荷神が現れ、鎮守神となったという伝承である。この伝承を絵画化した作品に「弘法大師行状絵詞」(東寺蔵)の第八巻がある。そこに登場する稲荷が、正しくこの稲束を荷う白衣の図像で描かれている。(図23) この伏見稲荷社と真言宗教王護国寺の密接な関係のもとに生み出された図像が、いつ頃誕生したかは定かでないが、少なくともこの絵巻の制作された十四世紀後半には登場していたことが確認できる。

一方、稲束を荷う翁の図像は「熊野曼荼羅」の中にも見いだせる。熊野曼荼羅は、熊野を中心とした山岳信仰の産物であるが、その制作背景には、高野山真言宗や天台宗の聖護院系修験など複雑な要素が混在し、多様な展開が見られる。その熊野曼荼羅の中で、鎌倉時代十四世紀にまで遡るとされる聖護院所蔵「熊野本地仏曼荼羅」他多数の作品に、熊野路に点在する九十九王子の一つ稲羽(葉根)王子が登場する。その姿が正に稲束を担ぐ浄衣の翁形で表されているのである。(図24) 恐らく稲を共通項とするところから、先行する稲荷形の図像が採られたと想像されるが、これにより、稲束を荷う稲荷像は、更に遡り十四世紀前半には、ある程度普及していたことが予想できる。²²⁾

そこで再び、本立寺本を見ると、その図像は稲束を荷うことなく膝前に置いている。これは、本立寺本が座像形式であることを尊重し、他の神像に合わせ、跪坐する姿勢にアレンジしたためと解される。そして、稲荷は他の神像と同じく三曲屏風を背にして礼盤に座す。なお、左手は持物があるようにも見えるが確認できず、右手の指を立てる形の意味は不明である。

それに対して妙光寺本は、「弘法大師行状絵詞」や「熊野本地仏曼荼羅」同様、稲束を荷う立ち姿で表され、三曲屏風も礼盤もなく、岩座の上を歩むような図像を示す。こちらは、既存の図像をそのまま引用した印象が強い。稲荷の烏帽子狩衣姿という身分に即し、屏風を描かなかった可能性もあるが、妙光寺

本は前掲した天照とこの稲荷のみ三曲屏風を描いていない。恐らく、先行する三十番神絵像には無い図像を、さしたる変更も無しに取り入れた結果ではないかと推察される。なお、左手に持つ扇子の意味は明らかでない。本立寺本の持物や手印と併せ今後の課題としたい。

なお、北野社伝来の本立寺本、即ち神社系と、妙光寺本両者に、日蓮宗系には無い同系統の稲荷の図像が採用された理由をどう考えるかは興味深い問題である。また、稲束を荷う稲荷の図像が「熊野曼荼羅」の稲羽王子と共通する点にも注目したい。筆者は、三十番神絵像の構成及び図像に、三十番神信仰の淵源である天台宗延暦寺の山王本迹曼荼羅の強い影響を想定してきたが、「熊野曼荼羅」の制作背景には天台宗寺門派の聖護院系修験の関与が予想されている。この点は、図像の導入経路を考える上で特に注目される。今回は「熊野曼荼羅」と三十番神絵像との関係にまで考究する用意は無いが、併せて、今後の研究課題としておきたい。²⁴

以上本章に於いては、両本の特色ある図像三体について考察し、検討を加えた。その結果、

- (1) 妙光寺本の神鏡の図像は、十七世紀に登場する神鏡を持つ女神形との関連が推察されると同時に、その背景に吉田神道の影響の可能性が想定される。
- (2) 本立寺本の八幡の図像は、八幡神のダブルイメージを合成した図像の可能性が考えられるとともに、北野社という神社系三十番神信仰の在り様を探る手がかりともなる。
- (3) 両本に共通する稲荷像は、弘法大師との関係に纏わる伝説を元に生まれた図像を採用したと考えられる。ただ、その採用の仕方には若干の相違が見られ、元となった図像の入手経路に関しては、弘法大師関係の絵巻や熊野曼荼羅など多くの候補があり、更に調査が必要と考えられる。

以上、本章では特色ある図像三体のみを取り上げ考察を試みたが、他の図像や配列に関しても今後検討を加え、両本の三十番神絵像としての性格を明らかにしていく予定である。また、妙光寺本に関しては開眼主を特定し、特殊な図像との関連について検討を加えたい。

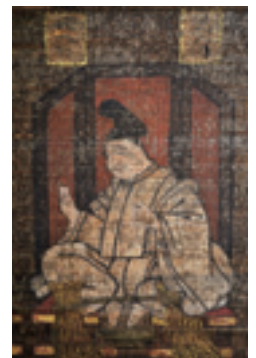


図20 本立寺本稲荷



図22 本行寺本稲荷



図21 妙光寺本稲荷



図23 弘法大師行状絵詞
部分 東寺蔵



図24 熊野本地曼荼羅
部分 聖護院蔵

結語

本稿では、北野社伝来の本立寺本と日甄開眼袿背墨書銘を有する妙光寺本という、特異な図像を示す三十番神絵像の概要を紹介し、更に両本の特色ある図像三点に焦点を絞り、他の座像系作品の図像とも比較検討しながら、その特色に関する考察を試みた。その結果、

- (1) 両本の三体の図像に関しては、前章において述べたような見解に達し、そのルーツと特色の一端を明らかにした。
- (2) 日蓮宗系図像の近世期における変化の背景に、吉田神道の影響を考える上で、神鏡という天照の持物が重要なポイントとなるという予測を得た。
- (3) また、三十番神絵像の図像研究の観点からは、従来の作品に無い特色ある天照、八幡、稲荷の図像という新資料と情報を提供し、若干の新知見を加

えることとなった。

なお、現段階では未解明の部分も多く、今後は、三体の図像と同じ図像を共有するような三十番神絵像の調査を続けるとともに、より広範囲の作品の中に同図像を探索し、その意味や導入経路の問題解明にも取り組んでいきたい。

大方のご教示と資料提供をお願いする次第である。

付記

調査にあたっては、本立寺ご住職佐藤光昶様、妙光寺ご住職佐藤憲成様のご高配を賜りました。また、長安寺ご住職川上大隆様には数々のご協力を頂きました。また写真掲載に関しては、清浄光寺(遊行寺)様のご高配を賜りました。此処に記して深謝の意を表します。

挿図リスト 出典

- 図① 本法寺本三十番神絵像
- 図② 大法寺本三十番神絵像
- 図③ 本行寺本三十番神絵像
- 図④ 本立寺本三十番神絵像
- 図⑤ 本立寺本袂背朱書と箱蓋裏朱書及び墨書
- 図⑥ 本立寺本大比叡
- 図⑦ 大法寺本大比叡
- 図⑧ 本立寺本三上
- 図⑨ 妙光寺本三十番神絵像
- 図⑩ 妙光寺本袂背墨書部分
- 図⑪ 大法寺本天照
- 図⑫ 本行寺本天照
- 図⑬ 本立寺本天照
- 図⑭ 妙光寺本天照
- 図⑮ 大法寺本八幡
- 図⑯ 奈良国立博物館本八幡
- 図⑰ 本立寺本八幡
- 図⑱ 後醍醐天皇像 清浄光寺(遊行寺)蔵 清浄光寺(遊行寺)提供

図⑱ 妙光寺本八幡

図⑳ 本立寺本稲荷

図㉑ 妙光寺本稲荷

図㉒ 本行寺本稲荷

図㉓ 弘法大師行状絵詞 部分 東寺蔵 「弘法大師行状絵詞下」 『続日本

絵巻物全集』一一 中央公論社

図㉔ 熊野本地仏曼荼羅 部分 聖護院蔵 「祈りの道 吉野 熊野 高野の

名宝」展覧会図録二〇〇四年

出典明記しない図版は著者撮影。

註

① 『叡岳要記』下、『門葉記』卷七九・如法経一、『如法経手記』等があげられるが、詳細は、拙論「金沢文庫保管称名寺所蔵「三十番神絵像」考」(『佛

教藝術』二四三号 一九九九年)を参照されたい。

② 註①拙論を参照されたい。

③ 註①以外の三十番神絵像に関する拙論「三十番神絵像小考(二)―談山神

社蔵「三十番神絵像」を中心に―」(『佛教藝術』二六四号 二〇〇二年)「三

十番神絵像小考(三)―本間美術館所蔵作品を中心に―」(『佛教藝術』二

七六号 二〇〇四年)「長谷川等伯筆「三十番神図」小考」(『美学美術史學』

一九号 二〇〇四年)「個人所蔵「三十番神絵像」小考」(『佛教藝術』二八

八号 二〇〇六年)「三十番神絵像再考―白髭(鬚)神社所蔵本の紹介を兼

ねて―」(『佛教藝術』一九四号 二〇〇七年)「異色の「金字法華三尊三十

番神真号」小考」(『佛教藝術』三一九号 二〇一一年)「池上本門寺所蔵「日

親筆 三十番神之名帳」紹介」(『京都本法寺宝物研究』二〇一一年)。

④ 三十番神の種類に関しては、その守護対象によって天地、内侍所、王城、

吾国、禁闕、法華、如法経、法華経、仁王経、如法経守護など多数あるが、

絵像に勧請される番神は、『如法経濫觴類聚記』(大正大藏経)に記される

三十番神と一致し、『神祇正宗』に説く法華守護と同等。詳細は註①を参照

されたい。

⑤ 天照皇太神に関しては、伊勢と天照の二通りの記述の仕方があり、その事

に関しては、拙論「異色の「金字法華三尊三十番神真号」小考」(『佛教藝

術』三一九号 二〇一一年)を参照されたい。

⑥ 先行すると推定される奈良国立博物館本(旧個人蔵)天台系三十番神絵像については、拙論「個人所蔵『三十番神絵像』小考」(『佛教藝術』二八八号 二〇〇六年)にすでに紹介し、その画像及び構成が山王曼荼羅と密接な関係にあることを提示しているのので、参照されたい。

⑦ 日蓮は、度々天照と八幡を神祇の代表としてその著作の中で語るばかりでなく、その「曼荼羅本尊」に天照、八幡を並置して勧請しており、この形式は後継者にも引き継がれる。

⑧ 『日蓮宗寺院大鑑』参照。

⑨ 山王本迹曼荼羅は基本的に山王二十一社内の神祇で構成されるが、特殊な例として、二十一社以外に北野や祇園、赤山といった比叡山延暦寺と密接な関係にある神祇を勧請する作例がある。そうした両者の関係を考える時、北野社伝来の本立寺本の図様は極めて重要である。

⑩ 『泉洲佐野 妙光寺文書』貞享三年丙寅九月七日 智鑑院 日蓮花押

⑪ 二〇〇四年の「修復報告書」によれば、以前の状態は「修復歴があり増裏紙の無い二枚仕立て」であったことがわかる。

⑫ 「諸仏救世者 住於大神通 為悦衆生故現無量神力」は法華経如来神力品第二十一、「常在靈鷲山 我此土安穩」は同如来寿量品第十六、「今此三界皆是我有 其中衆生 悉是吾子 唯我一人能為救護」は同譬喻品第三よりの引用である。賛文解説には、長安寺住職川上大隆氏のご教示を頂いた。

⑬ 『日蓮宗寺院大鑑』参照。

⑭ 長安寺住職川上大隆氏のご教示による。

⑮ 池田本覚寺は、中老僧日位が徳治二年(一二〇七)に開基した日蓮宗本山である。

⑯ 吉田兼俱の後継者吉田兼右が、永禄三年(一五六〇)頂妙寺の日珖に与えた三十番神の神名と画像を書いた『神道神秘伝』(頂妙寺所蔵)には「十日伊勢 女躰 御手令持鏡給」とある。但し、三十神全ての画像が一致しているわけではない点、注意を要する。

⑰ 十五〜十六世紀の三十番神絵像では、客人、稲荷、熱田が女神形をとるのが一般的であるが、拱手するか、翳や団扇、如意宝珠や宝剣を持物としてゐる。これは先行する山王曼荼羅や仏教画像からの引用によるものと考えられる。それらに関しては別稿を以て論じたい。

⑱ 錫杖ではなく、翳のような物を持つ場合が多い。

⑲ 註①の『神道神秘伝』には「十一日 八幡 男体 玉冠 正笏」とある。

⑳ 天皇の祖先神伊勢の天照を中心に、武家の守護神八幡、藤原氏の氏神春日の三社の神号や託宣をセットで記した信仰対象の掛物を「三社託宣」といい、中世以降に広まる。

㉑ 註①拙論「金沢文庫保管称名寺所蔵『三十番神絵像』考」(『佛教藝術』二四三号 一九九九年)。

㉒ 稲荷形の稲葉根王子を描く「熊野曼荼羅」は、他にも和歌山県立博物館本、湯川神社本など数多い。ここでは最古例の作品を紹介した。

㉓ 因みに翁形に注目すると、日蓮宗系座像形式では、鹿島が同じく翁形で表され、立像系では、住吉明神が翁形で表されることを付記しておきたい。

そこには、中世社会において、神のイメージを翁で表すといった共通する傾向が垣間見える。

㉔ 筆者は以前、立像系三十番神絵像に関し、「熊野曼荼羅」との関連について若干の私見を述べた。拙論「三十番神絵像小考(二)―談山神社蔵『三十番神絵像』を中心に―」(『佛教藝術』二六四号 二〇〇二年)。